

(セッション NO.5)「被災者と受入者とのお茶会トーク」

○開催日時：平成27年9月16日（水） 9：00～12：00

○場 所：広野町中央体育館（アリーナ）

○ファシリテーター

・ 福迫 昌之（東日本国際大学）

○コーディネーター

・ NP0 法人 3.11 被災者を支援するいわき連絡協議会

○ワークショップ参加者

・ 茂木 茂男（いわき市高久第三仮設自治会・広野町）

・ 武藤 一雄（檜葉町高久第八応急仮設住宅自治会・檜葉町）

・ 田中 美奈子（いわき市在住富岡町すみれ会・富岡町）

・ 遠藤 義之（株式会社 観陽亭・富岡町）

・ 草野 弘道（中央台鹿島2丁目民生委員・いわき市）

・ 原田 由香（みんなともだちプロジェクトいわき支部・いわき市）

・ 渡邊 大輔（(公社)いわき青年会議所・いわき市）

○参加者数 約20名

○概 要

自己紹介・話題提供→ディスカッション→質疑応答

○内容

1. 自己紹介・自分または身近な人が現状どうなっているか、これからどうしていくか。

- ・ どこに住んでいるかは問題でなく、人と関わる際にその人がどのような人かが重要。子供同士の交流の中では、軋轢は生じない。
- ・ 故郷で生活したい気持ちはあるが、利便性に慣れてしまい、また不便なところで生活はできない。町への帰還してもらうには、便利な環境が整備されてからの帰還の促しが必要。
- ・ 震災でバラバラになったコミュニティのつなぎ役として、どうつないでいくか。紡いでいくかに挑戦して実践していく。
- ・ 民生委員同士や老人会の中でも意見の相違があり、賠償の問題や住民票の問題という壁があり、受入賛成派と反対派に分かれていた。しかし、このようなことは問題でなく、受入先としてこれからも受け入れたい。
- ・ いわき市民との軋轢はあるが、いわき市も双葉郡も一緒に仲良くなるため、自分達から歩み寄っていくことで地域との関わりができる。
- ・ いつまでも「避難者」のままではいけない。自立する力を付けていか

なくては将来を描けない。

<まとめ>

- ・震災後、仮設での軋轢、家庭での軋轢、いわき市と双葉郡の軋轢は、ある程度あるのはむしろ当然。地域アイデンティティや「絆」と隣組などの日常生活は必ずしも同一ではない。ボタンの掛け違い、住民票の問題や行政の問題はあるものの、それらを越えて現実的な共生が重要である。

2. いわき市と双葉郡の方はどのようなになるのか。これからの自分と町の展望をどう考えるか。

- ・帰りたいのは高齢者のみ、それ以外は帰りたくない。高齢者が移り住むと介護が必要であり、それには現役世代、若年層の動きが鍵である。
- ・いわき市の行政会議やいわき市復興計画の中で、双葉郡との共生、政策は具体化されていない。双葉郡の人達も、双葉地域なのか自治体（行政組織）を守りたいのかわからない。
- ・お互いが対等の立場でいることが重要である。
- ・双葉郡の方はその日暮らしの応急仮設住宅に住むことはできたが、震災から5年目でも新しい状況になっていない。仮設住宅からは人が減り、タイムリミットも近づいており、決断しなければならない。
- ・行政のトップの話し合いが必要（いわき市・双葉郡）行政の垣根を越えて、方向性を決めて進めていくといったことを示すことで町民の不安が解消される。
- ・受入れる方と受入れられる方の双方でメリットがある状況（ウィンウィンの関係）を保つ必要があるが、経済的にプラスになることは言わず、マイナス部分（賠償やゴミの問題など）ばかりが表沙汰になる。
- ・軋轢は悪くない、何かがぶつかることは自然。お互いの意見がぶつからないことが問題である。問題を検証していく仕組みが必要であり、同じ状況で対話できるようにしたい。

<まとめ>

- ・帰る、帰らないの問題を解消するためにも、自分自身の将来像を定めるためにも、行政の枠組みに固執したビジョンでなく、この地域全体のビジョンをつくっていくことが早期の課題である。軋轢自体は意見が外に出ないことで生じている。解消には話し合いが重要であり、そうした場を設定する必要がある。今回がその契機になればよい。